

平成 25 年 7 月 29 日

特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会
第 8 回理事会議事録

日 時	平成 25 年 7 月 29 日 12:40～16:30
場 所	産業技術総合研究所 生命情報工学研究センター 10 階会議室 (東京都江東区青海 2-4-7 産総研臨海副都心センター別館)
出席者	(本人出席) 浅井理事長、清水副理事長、油谷理事、川島理事、木下理事、藤理事、中井理事、松田理事、水野理事、小森理事、坂田理事、八谷理事、ホートン理事、美宅理事 (表決書提出) 佐藤理事、西川理事、馬見塚理事、岩崎理事、大林理事、奥村理事、瀬々理事 以上 21 名出席扱 (オブザーバ) 木下 2014 年会長／東北地域部会長／認定試験 WG メンバー、白井 H25 認定試験委員長／関西地域部会長、坂井 (事務局、書記)

議長 浅井理事長 (定款第 35 条による)

配布資料

- ・ 議案書
- ・ 技術者認定試験に関する WG 報告書、同 別紙
- ・ 大林理事からの意見書
- ・ JSBi バイオインフォマティクス技術者認定試験教科書出版について、同 見本
- ・ JSBi2013 年会について、同 プログラム案、関連資料 (JSBi 公募研究会 サテライトシンポジウム案)
- ・ 生命医薬情報学連合大会 2014 年大会 計画素案
- ・ JSBi 年会開催規定
- ・ 日本学術会議大型研究計画「国立バイオインフォマティクス研究所」ヒアリング資料
- ・ GIW2014 等について理事メーリングリストで行われた議論のコピー
- ・ JSBi が行う顕彰に関する馬見塚理事の意見メールのコピー

議事

議事録署名人の選定

議長より議事録署名人を選任したい旨の提案があり、ホートン理事と川島理事が全員の賛成により承認された。

審議事項

1 バイオインフォマティクス技術者認定試験について

1-1 技術者認定試験に関する WG の報告

藤理事より別紙「技術者認定試験に関する WG 報告書」に基づく説明があった。

議論の後、次の方針が決まった。

- ・会員から意見を聞く。方法は、何人かのリーダーシップで考えてもらう。
- ・WG メンバーには引き続き協力してもらう。

1-2 教科書出版について

中井理事より別紙「JSBi バイオインフォマティクス技術者認定試験教科書出版について」に基づく説明があった。

議論の後、理事会の総意として、学会認定本とすることを前提に制作にとりかかってもらうこととした。

編集体制は白井先生を責任者とし、執筆者の人選も一任することとした。

最終的な認定時期はいまは決めず、適当な時期にメール審議で議案を上げてもらうこととした。

2 年会について

2-1 JSBi2013・第 2 回生命医薬情報学連合大会の準備進捗状況報告

中井理事／JSBi2013 年会長より、JSBi2013・第 2 回生命医薬情報学連合大会の準備進捗状況の報告があった。予定しているプログラムでは公募の口頭発表時間を多くとっているのが、口頭発表件数によっては 1 件当たりの時間が動くということであった。ホームページが見にくいという指摘があった。

公募研究会として提案があったサテライトシンポジウム「ビッグデータ解析と統計学に関する人材育成研究会」の実施方法について議論があった。公募研究会の本来の趣旨から、また、年会においては持ち込み企画はスポンサードセッションという形をとり、企画者が開催費を支払う仕組みになっていることから、少し違和感と不公平感があるという意見があった。しかし企画が悪いことはないので、10 月 28 日の他のセッションがない時間帯にタワーホール船堀 401 号室を使わせる、会場費は JSBi がもつ、サテライトセッションを名乗る、ことを認めることとなった。また JSBi 会員の参加費は無料にしよう、その他の費用は負担しない、という条件付きで公募研究会として採択する方向で、提案者と交渉することになった。

2-2 JSBi2014・生命医薬情報学連合大会 2014 年大会について

木下 2014 年会長／JSBi 東北地域部会長より、別紙に基づいて計画素案が説明された。2014 年も 3 学会の合同大会の形は維持し、連合大会長は当番であるオミックス医療研究会より、山本雅之先生（東北大学医学系研究科／東北メディカルメガバンク機構機構長）が引き受ける。日程は 2014 年 10 月 2～4 日の 2.5 日間とし、会場は仙台国際センターを予約済みである。

CBI 学会はこの連合大会とは別に年会をタワーホール船堀で 2014 年 9 月に開催する予定とのことで、連合大会には 100 万円を出資する、セッションを 1 つくらいもってもよい、という連絡があった。

連合大会のあり方、JSBi の年会のあり方、JSBi の方向性について多くの議論が交わされた。

2014 年も連合大会を開催し、実行委員会（合同事務局）を立ち上げることで、CBI にも声をかけることになった。NGS 現場の会にも声をかけることになった。実際には JSBi は連合大会のメインコンテンツを担う方向で進めることが了承された。

またこの後の「3 その他 GIW2014 について」の議論では GIW2014 誘致の可能性も探ることになった。

3 その他

3-2 GIW2014 について

最近理事メーリングリストで GIW2014 のことが話題になったので、情報共有の意味で理事会の話題として取り上げることにした。

JSBi の年会はかつて 2006 年までは GIW であったが、2007 年にアジアの学会連合 AASBi が GIW を official conference としたので、2007 年以降は JSBi は別に年会を開催するようになったという歴史的経緯が松田理事より説明された。GIW は AASBi 加盟国で順番に開催されており、日本、シンガポール、オーストラリア、台湾と回った。来年は GIW25 周年の節目なので日本で開催できないかと打診されている。フィリピンでやりたいという希望もあるようだが実現可能性は低い。日本で開催する場合 JSBi が担うことになる。

議論の後、連合大会に GIW2014 誘致の可能性を探ることになった。

3-1 国立バイオインフォマティクス研究所について

3-3 日本学術会議生物物理学分科会主催の公開シンポジウムに対する共催依頼について

両案件に関係する美宅理事より、別紙資料「日本学術会議統合生物学委員会 大型研究計画評価分科会による 6 提案課題のヒアリング」に基づき、国立バイオインフォマティクス研究所の経過報告と、関連する生物物理学分科会のシンポジウムについての説明があった。

国立バイオインフォマティクス研究所については、3 月末に提案書を提出後、5 月にヒアリングを受け、まだ結果が出ていないとのことであった。美宅理事より本件については JSBi の協力をお願いしたいという発言があった。実現するとなったらどうしたらよいかなどの議論があった。

生物物理学分科会のシンポジウムについては、国立バイオインフォマティクス研究所と同じく、日本学術会議の大型研究計画にバイオイメージング研究所を提案するための準備シンポジウムであることが美宅理事より説明された。現時点で依頼されているシンポジウムの共催は認める方向となった。

審議事項は以上、定刻を過ぎ 16:40 に閉会となった。

上記の議論を明確にするため、議長及び議事録署名人において次に記名押印する。

平成 25 年 7 月 29 日

特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会

議

長

浅井 淳



議事録署名人

川島 武士



同

PAUL HORTON



補 議論内容

1 バイオインフォマティクス技術者認定試験について

1-1 技術者認定試験に関するWGの報告 議論内容

藤理事からの報告書説明後、最初にWGメンバーから個人的な意見を聞いた。

=WGメンバーの意見

- ・ “認定試験は基本的によくはないもの論者”として；
認定試験は学生に不安をあおり、ポジティブに発展しない。まして国家試験となったら“この範囲こそがバイオインフォマティクスである”と規定してしまい、バイオインフォマティクスが自由な学際分野ではなくなっていくのでは。
認定試験の経緯をニュースレターでみると、“このままでは来年からなくなってしまうから受け継いでくれ”と秋山さんに言われて大慌てで受け継いでずっとそのままやっているだけのようだ。認定試験の目的は、試験でなくとも、「良い教科書を作りときどき改訂する」「良い人にPrizeを出す」ことで達成できる。
何年かに1度見直す条項を入れておいてほしい。(川島)
- ・ 4~5年関わっているので冷静に“廃止”の方向に頭がいかないが、認定試験について考えるいい機会になった。
受験している学生をみると、やってよいと思う。
何年かに1度の改訂はよいと思う。
この分野は変化が速いので教科書は難しい。
始めた最初の経緯は確かに不明だが、せつかく始めた以上続ける道を模索したい。(木下)
- ・ 最初は“とにかく引き受けてくれ”から始めたかもしれないが、当時の評議員会では反対意見や疑問はなく、“いいことですね”と続いてきた。認定試験をよくしていく努力は必要だが、じつはこれは大変で、一旦軌道に乗ったものを維持するのはそんなに大変ではない。試験改訂は、別の委員会で諮問してもらって、認定試験委員はルーチンになっているものをやるだけにしておきたい。(中井)
- ・ 認定試験の中身はよくわかっていないが、運営面でのコストはいろいろかかっていると聞いている。長く続けているのでいろいろなところで活用してもらっている。
分野外の人には、自分が何ができていて何ができないかわかるのでよい。ぱっとはやめにくい。(松田)
- ・ 取りまとめ役だったので、WGの運営は中立の立場でやった。
昨年度認定試験委員長だったが、いままでのままでいいのかという議論があった。
とくにコスト面。認定試験は、委員長の個人秘書のがんばりで運営していて、秘書がいない先生が委員長では動かない。
学会に人をリクルートするためにやりたい、と秋山さんは言っていたが、実際には、周辺領域の人の力試しとなっている(会員数増加にならない)。学会のためにするにはもう少し改善が必要と思う。
またこのWGでは決定権を持たないと最初に決めたので、決定は理事会にお願いしたい。(藤)
- ・ 学会員から意見を集めたい。(川島)

- ・ 利用者の意見も聞きたい。(中井)

=WGメンバーの意見ここまで

- ・ そもそも BI-CERT は JBIC がやっていた。委員会に、宮野、秋山、浅井の 3 人が入っていた。初年度はよかったが 2、3 年目に大赤字となった。それでも JBIC の熱心な人がいたのだが、結局 JBIC では続けられなくなり、宮野先生が小さくやろうと、light weight にいこう、受けた人だけががんばってもらおう、と提案されて JSBi でスタート。秋山さんががんばっている形の原型ができた。(浅井)
- ・ 日本のバイオインフォマティクス教育の現状は？学部でバイオインフォマティクスを教えるのは少数で、修士も減少傾向にある。自分で興味をもっている人はいるが、人材は、募集しても来ないので、少ないといえる。この試験は学部の試験に相当するものなのか？それとも周辺領域の人の腕試しが多いのか？(八谷)
- ・ 周辺の腕試しが多い印象。(藤) 同意見。生物系のほうが情報系より多い感じ。(中井)
- ・ バイオインフォマティクス教育を受けていない人にとって、この試験に受かることは、大学のコースを取るのと同じ価値があるか？(八谷)
- ・ バイオインフォマティクスの分野は 20 年先に細ってはいけな。発展させなければ。(美宅)
- ・ シーケンサーが医療機関に普及していく時代なのに、医学系の方から JSBi のは参考にならないと言われている。(ホートン)
- ・ この認定を受けたメリットはあるのか？就職が有利になるとか社内でのポジションとか？(清水)
- ・ 内容が学部試験レベルで、現場では役に立たない。外注するときこの試験に合格していることを条件にする程度。直接的なメリットにはなっていない。(藤)
- ・ 英検 1 級、のように、認知度を上げて大きくする方向？(坂田)
- ・ 試験の内容が変わらないと、受験者の役に立たないと思う。(藤)
- ・ 試験では、マークシートで点を取れる人がはびこってしまって、世の中のためにならない。もっと出張講義をすとかホームページに電子教科書をつくとかしたほうがよい。(川島)
- ・ この試験の普及度合い？(美宅) →受験者数 110 人/年
- ・ 100 人/年の規模感なら、そんなに少なくない。日本の学部の卒業生数もそのくらいでは？(八谷)

議長による論点整理

- 廃止すべきなら、今、止めたくなる原因は何か？
- 教育内容、教科書化
- 会員獲得問題
- ・ 3~4 年の phase を作って改善を試み、なんとなくダラダラ続けるのはやめたほうがよい。(川島)
- ・ コスト問題。事務局運営コスト。白井先生に今年は事務局を持ってもらったが。(藤)
- ・ 恒久的にコストが上がるとは思えない。パートタイムの秘書の空き時間に働いてもらっている。(白井)
- ・ 秘書を雇うお金。秘書のいない人に認定試験委員長は無理だ。(藤)
- ・ 認定試験だけでなく、学会、年会、ほか、(学会では様々な事業があるので)学会の中でどうお金をかけるというバランスやコスト問題がある。(浅井会長)
- ・ 100 人/年なら、10 年で 1000 人になる。産総研 CBRC で人材養成を実施している立場から意見はあるか？(浅井)

- ・ CBRC ではバイオインフォマティクス分野全体をジェネラルに“できる”人の養成は目指していない。認定試験の目的と違うので意見はない。ジェネラル人材を 100 人／年輩出しているのは大したものだと思う。(坂井)
- ・ 認定試験の内容が世の中のニーズと合っていないという議論はあったのか？(議長)
- ・ あった。去年の瀬々委員のコメント。あとはコスト問題。(藤)
- ・ コストは、教育に関してはいくらかかってもいい。価値があればやるべき。(川島)
- ・ コスト問題を解決するために、(受験料収入が) あとどのくらい必要なのか？(水野)
- ・ あと 100 万円くらい。受験者数 300 人くらい(が採算ライン)。(藤)
- ・ その数字は妥当だろう。JBIC 時代の BICERT が実証している。(川島)
- ・ 問題を「基礎」と「即戦力」の 2 段階にして、ターゲットをクリアにはどうか。この試験で即戦力は測れていない。(八谷)
- ・ JSBi で議論を公開し、会員から試験についての意見をもらって、理事会で最終決定してほしい。(藤)
- ・ 意見を聞こう。うまいやり方を、何人かのリーダーシップでやろう。WG は引き続き協力してほしい。(会長)
- ・ 所掌範囲を明確にしたい。この WG では教育のあり方を議論しないことにしたが、それは学会の根幹である。この学会の根幹に関する、ちゃんとした議論の場がほしい。(木下賢吾)

1-2 教科書出版について 議論内容

- ・ 企画の主意としては、過去問を利用することであまり手間をかけず、教科書と問題集の中間のような、参考書のようなものを作ることにあった。しかし認定試験の存廃を議論しているなかで、学会認定教科書を発行することは、学会の方針と conflict することにならないか心配である。(白井)
- ・ 出版社側としては、学会公認がないと売れないだろう。100 人／年？ 受験する側にとっても、問題集が 1 冊あるととても受けやすくなるだろう。(美宅)
- ・ 過去問の著作権者はどうなっているか？(木下賢吾)
- ・ 契約書はないが、学会に帰属するとしてよいはずである。(白井)
- ・ JSBi として正式に承認するなら、内容が全部決まっていけないとならないのか？
また、ウェブ公開はしないのか？以前つくったバイオインフォマティクス事典もウェブで公開していれば、数万人は見てくれたはず。販売実績は数百ではないか。(ホートン)
- ・ 内容を決めてから承認してもらうことは考えている。ウェブと連動した出版もあると思う。(白井)
- ・ 全過去問に 1 行の解説をつけたものはすべてウェブに出している。(中井)
- ・ 年間 100 名では商売にならないので、初学者が学べるバイオインフォマティクスの教科書を目指してほしい。(白井)
- ・ バイオインフォマティクスはとても範囲が広いが、それを 1 冊でカバーするつもりか？(清水)
- ・ 認定試験が毎年 80 問で、6 割とれば合格。(そのくらいのボリューム感。)(白井)
- ・ 教科書を目指すのか、問題集を目指すのか？学会認定教科書＝学会がバイオインフォマティクスの範囲を決めた、ということになってしまうのでは。(木下賢吾)
- ・ 教科書、ということは、これで授業をせよと？(松田)
- ・ 自習書を意図している？(美宅)
- ・ 編集は今年の試験委員会が担当する。今年の試験業務が重なると大変なので、(藤)

- ・ 目次の作成を9月に、執筆期間を10月から5月として、委員の業務期間とずらす。執筆は今年度委員と過去の委員に依頼し、1委員あたり2問(4ページ)を担当してもらうことを考えている。(白井)
- ・ すでにある事典の内容との重複は？(八谷)
- ・ 内容の重複はあるが、試験の学習参考書向きに作りたい。(白井)
- ・ さきの事典の著作権はどうなっているのだろう。ウェブ公開の可能性はあるのか？(浅井)
- ・ 今回具体化した教科書案は慶應大学出版会が前向きに検討してくれたのだが、これは、元共立出版にいた人が今慶應にいて担当してくれているから。(中井)
- ・ 本は似たようなものが何冊もあってよい。(美宅)
- ・ 学会として認めるという決定をいつどうやってするか？内容は見るか？(議長)
- ・ 添付資料もあったし、そこそこの内容でもうOKとしては。(ホートン)
- ・ 添付資料は、初学者向けにしてはフォントが小さい。改善を。(八谷)
- ・ つい内容を詰め込みたくなってしまうので気をつける。(白井)
- ・ たまたま見本にあった部分だが、Smith-Waterman-Gotohとしたほうがよい。(ホートン)
- ・ 出版社は学会認定をつけてほしいのか？(松田)→そう。(中井)

2 年会について

2-2 JSBi2014・生命医薬情報学連合大会 2014 年大会について

- ・ 新学術領域を学会で、みたいな組み合わせで、JSBi でやっている先生を誘う？(川島)
- ・ メガバンクがスポンサードセッション。医学系の人からお金払ってやらしてもらわないと。(木下)
- ・ Omix はとても小さいのでセッション持たせられない。仙台ではやりたいと言っている。(中井)
- ・ Omix の人で、JSBi と関係が深い、医科歯科大の田中先生のところにいた荻島先生が東北にいる。(木下)
- ・ 医学系を強くしたいという具体的な案はあるのか？(松田)
- ・ 会計は別に。(中井)
- ・ CBI が抜けているから年会としての独立会計にしようか。CBI が100万円はくれる。(木下)
- ・ 医学系の金銭感覚でやられると無理がある。(美宅)
- ・ 情報系が主体だが、医学系をとりこみたい。医療系にアピールするチュートリアルや講習会を企画したい。(木下)
- ・ 実験データは予算をかけると取れるが、その先どうするか、という点で JSBi は期待されているのでは？(美宅)
- ・ JSBi が期待されているのではない。連合大会長になった山本先生もハシゴを外された一人。山本先生と Omix の人たちに謝って、連合大会ではなく JSBi の年会として開催する方向は？(木下)
- ・ 2015 年以降のあり方も含めて議論したい。(議長)
- ・ 連合大会をやるという目的は？(藤)
- ・ 参加する人にとっては、3 学会が別々に開催しているのがいけないので、同じ会場で同時にやっていて往来がある形を目指したかった。(松田)
- ・ 学会自体の合併も意識していたが、それは昨年のを通じて、無理なことがわかった。(浅井)
- ・ 2014 年は3年目(3学会の担当が一巡する節目)なので、連合大会をやるべきだ、ということなら、

粛々と JSBi がエフォートを割いてやるが。(木下)

- ・ しいまは分裂するときではない。(美宅)
- ・ これから、ヒトも含め、同一種多数 DNA データが出てくる時代で、いろいろな人が集まる。盛り上げ方はたくさんあるはず。JSBi の若い人の就職先を広げるために企業の人とのコミュニケーションを維持する、なら、来年もがんばる。学会にしなくても(研究交流はできるという風潮がある)。バイオインフォマティクスに期待している人は、就職とは関係ない人だろう。(川島)
- ・ JSBi と組みたい他の研究会や学会が増えているはず。(美宅)
- ・ 学会の方向性として、バイオインフォマティクスのニーズは高まっているが、ニーズを感じている人たちが JSBi 年会には来ていない。間口を広げて、wet の人が入ってきたいような(方向を目指すべきでは?)。(木下)
- ・ いまは、トヨタ中央研究所の人(車の人)がバイオインフォマティクスに興味を持つ時代だ。ちょっと辛抱して本当に発展させて頑張ればよいのではないか。(美宅)
- ・ 年会は学会の一番大事なイベントなので、理事会で方向性を決めてほしい。(木下)
- ・ CBI が 2014 年についてどういう希望を言っているのか?(ホートン)
- ・ 小長谷先生は、JSBi とは一緒にやられていない、という態度が明確。しかし CBI に対する内政干渉はできない。(浅井)
- ・ CBI 学会は毎月の研究会にウェイトをかけている。年会はそれほどでもない。小長谷さんが思っているならそうなる。来年の連合大会の委員会(事務局)を立ち上げましょう、と CBI にも声をかけていったらどうか。(美宅)
- ・ 来年の東北メガバンクと JSBi の関係性について。間口を広げる方向か、とんがっていくか。(八谷)
- ・ 間口を広げるということに関して、純粋に dry なバイオインフォマティクスをやっているのに JSBi 年会に出てこない人もある程度の割合でいる。また若手の会や現場の会が JSBi に対して冷ややかな目でみていて批判的である。(浅井)
- ・ その危機感はある。自分も JSBi が活動の中心ではなかったが参加するようになった。若手の会がものすごく人気があるが、それはバイオインフォマティクスにニーズがきたとき JSBi が対応できなかったから。一方で、楽しいだけの研究会ではなく、政治につなげる面倒くさいところも含めた学会活動というものも存在する。いまの若手の会はそこが乖離してしまっている。楽しい部分だけの研究会の人たちも、本家・JSBi 年会がとても面白ければ、参加してくるし、それはみんなにとって幸せなことだろう。(川島)
- ・ 学会の存続レベルの危機感はある。JSBi に若手が足りないのも、この学会が受け皿になってこれなかったからか、と思っている。(木下)
- ・ ほぼ同じ危機感を持っている。積極的に会員が入ってきていない。JSBi に期待していない・JSBi では発表しなかった、というのはなぜなのか。(浅井)
- ・ 日本がゲノムで負けたから。アメリカでメジャーに使われているもの、出ているツールを使いたい、学びたいので、JSBi オリジナルツールなど興味がない。(川島)
- ・ 情報とバイオを両方学んできたので、JSBi では分子生物学を語れないところがつまらない。若手、現場の会は、バイオロジーに軸足があって、どういうツールをアプライしていくか考えている。JSBi は屋台骨が違う。(八谷)
- ・ wet で相当盛り上がっているのか?(美宅)

- ・ wet、dry、で分けない。知りたい問いに向かって、どっちを使うか併用するのか考えている。(八谷)
- ・ アメリカは（シーケンサーのような）wet のツールをつくって、周辺のバイオインフォマティクスツールも作って、日本ではそれらを使う、という構図になっている。アメリカはまだ dry の方でやることはあるのだろうか？ (美宅)
- ・ 例えば近い過去に見られたような SAM tools の充実が良い例になる。こういった同一フォーマットで広がりのあるアルゴリズムとツールの一群が普及するブームを国内で独自につくると、また国内の研究もどんどん学びたくなる。(川島)
- ・ 年会の役割を考えてみたい。「最新情報を知りたい」「コミュニティを広げたい」「マッチングをしたい」…JSBi の年会には何かが欠けている。(木下)
- ・ dry 中心の人がつくっている学会で dry 寄りすぎる。(浅井)
- ・ 学会というのは何十年も続くもので、現場の会は、スポンサー頼みだったり、何十年も続く形ではない。JSBi が置かれている問題は、バイオインフォマティクスを必要としている世の中の人から切斷されていることではないか。(川島)
- ・ ヒトゲノム計画などでいろいろな疑問が出されたが、なかなか答えが出ない。そこで矮小化した問題を出してそれには答える、ということをしてごまかし続けている。大きな疑問をもう一度設定し直して、それに対してどうするか、もう一度考え直すべきだと思う。問題設定が大事だ。(美宅)
- ・ 学会は考える場だから。(木下)
- ・ 二重性格みたいな society でいい。数理について議論や発表する場は絶対に保っていききたい。NGS など発展したのに JSBi は応えていない。(ホートン)
- ・ 「現場の会」というネーミングには、JSBi は現場にいない、という批判が聞こえてきそうだ。(浅井)
- ・ RNA 学会は小さな学会だが、懇親会に若い人が出てきて全員最後までいる。若い人が来ない学会に将来はない気がする。教科書、認定試験、年会、すべてに関わると思うが、バイオインフォマティクス学会のあり方を考えるときだ。(浅井)
- ・ 来年の準備はどうすればよいか。(木下)
- ・ Practical には間口を広げていく方向。(浅井)
- ・ 需要に応えられていない。(藤)
- ・ 現場の会と一緒にやってみたい。正式なチャンネルはどこか？ (木下)
- ・ 八谷先生か岩崎先生では。(八谷)
- ・ 合同年会のトリガー引きはやる。事務局には、CBI はのってこないと思うが。間口を広げる努力をする。(浅井)

3 その他

3-2 GIW2014 について

- ・ 例年 GIW は 12 月ごろやっているが、来年は JSBi は 10 月なので、両方は無理だろう。
- ・ 仙台の連合大会を GIW にしてしまっは？
- ・ 連合大会は GIW にはしない、という小長谷先生との約束があったが、小長谷先生が連合大会から降りた今はチャンスかもしれない。

- ・ GIW2012 は参加者は 200 人以下で大学の教室で小ぢんまりとやった。このような会議は企画もしにくくないし、好きだ。大きな会議は大変だが、日本の研究を世界に行ってもらうために、仙台に GIW を呼んで国際プレゼンス向上を狙うのもよいのではないか。ここで大きい会議に乗るのはチャンスだ。(ホートン)
- ・ なぜ来年日本でやりたいのか？
- ・ 25 周年の節目。また関係者からは日本開催の回が他国開催時より内容がいいと言われている。
- ・ これはどう決めるか？仙台で、日本主催でメガバンク込みの GIW の重要性はよくわかる。(川島)
- ・ 個人的に意見を聞いていると、諸外国関係者で、日本で開催するのに反対する人はいない。GIW は沖縄や西日本の人の参加者が多いが、だからこそ西日本で開催するのは NG で東日本でやりたいと、高木先生 (DBCLS) は考えているようだ。(松田)
- ・ ちょうど 10 月 5 日がトーゴーの日だが、2014 年年会は 10 月 2 日から 4 日にやるので、DBCLS にはオファーしてみようと思っていたところだった。会場はどこか？パシフィコ横浜クラスか？(木下)
- ・ ポスター会場にいつも困るのだが。(松田)
- ・ これは、連合大会に GIW を呼ぶのがいいのではないか。小長谷先生と話してみる。GIW、東北メガバンク、そして JSBi、というのはベストソリューションに思われる。(浅井)
- ・ 年会規定について
- ・ 公用語が英語と定められていたとは。若い人には敷居が高い。(木下)
- ・ 年会長が独自で判断できるよう改定してある。(浅井)

3-1 国立バイオインフォマティクス研究所について

3-3 日本学術会議生物物理学分科会主催の公開シンポジウムに対する共催依頼について

- ・ 実現するとしたらどうしたらいいか考えたい。若い人の WG でもんでおくべきか、政治的な生臭いことは若い人にやらせてはダメか。とにかく 8 月 1 日にバイオインフォマティクス分科会 (メンバー：郷通子先生、五條堀先生、高木先生など) があるので、若い人と提案をもまない、と言ってこようと思っている。(美宅)
- ・ もともとバイオイメージングは国立バイオインフォマティクス研究所提案の一部を成していた。
- ・ これを独立した研究提案をすると、日本学術会議バイオインフォマティクス分科会が提案している国立バイオインフォマティクス研究所の実現可能性を下げる力になりえる。そのためバイオインフォマティクス分科会は共催しないことにしたが、生物物理分科会はバイオインフォマティクスに関するコミュニティーの支持は得ておきたいということで、JSBi に共催の依頼がきたという事情である。
- ・ 9 月 14 日のシンポジウムの当日はパネリストとして発言の機会があるので、バイオインフォマティクスを思いきり大きく考えるべきだと主張したいと思っている。(美宅)
- ・ 理研 CDB ができたとき、研究費の集中配分が行われ、発生生物学につく科研費が極端に減ってしまった。バイオインフォマティクス研究所も実現したら同じことが起きて、日本国内のバイオインフォマティクス研究者が困ることにならないか？(川島)
- ・ そこでパイを大きくして若い人が来られるようにしたいと考えている。予算の問題は難しい。(美宅)
- ・ この研究所が funding agency になるのか？(木下)

- ・ オールジャパン態勢がとれるか、いろいろな人にコミットしてもらえているのか心配だ。(川島)
- ・ オールジャパンでやる努力は必要だ。(美宅)
- ・ 日本学術会議では大型提案に結びつけるシンポジウムは重要である。(松田)
- ・ (国立バイオインフォマティクス研究所は) 数百の提案から 100 程度まで絞る一次スクリーニングは通っている。最終的に通るのは 20 件あるかないか。(美宅)

議論の部 以上